

## §2. 定積分

以下  $-\infty < a < b < \infty$ ,  $f(x)$ : 閉区間  $[a, b]$  で定義された有界な函数 ( $|f(x)| \leq M$ ).  
 $a = x_0 < x_1 < \dots < x_n = b$  と分点を取って (等間隔とは限らない), 閉区間  $[a, b]$  を  $n$  個の小区間  $I_i := [x_{i-1}, x_i]$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) に分割する. この分割を  $\Delta$  で表す.

$$\Delta : a = x_0 < x_1 < \dots < x_n = b$$

そして,  $|\Delta| := \max_{1 \leq i \leq n} (x_i - x_{i-1})$  とおく.

$\forall \xi_i \in I_i$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) をとり,  $\xi := (\xi_1, \dots, \xi_n)$  とおいて

$$R(f, \Delta, \xi) := \sum_{i=1}^n f(\xi_i)(x_i - x_{i-1})$$

を, 分割  $\Delta$  に関する  $f(x)$  の **Riemann 和** と呼ぶ.

**定義 2.1.**  $f(x)$ : 閉区間  $[a, b]$  で積分可能

$\stackrel{\text{def}}{\iff} |\Delta| \rightarrow 0$  のとき,  $R(f, \Delta, \xi)$  が  $\xi_i \in I_i$  の取り方に関係なく, ある実数  $A$  に収束すること:  $\exists A = \lim_{|\Delta| \rightarrow 0} R(f, \Delta, \xi)$ .

このとき, 極限值  $A$  を  $f(x)$  の閉区間  $[a, b]$  における定積分と呼び,  $\int_a^b f(x) dx$  と表す.

**注意 2.2.** より正確には, 教科書のように  $S(f, \Delta)$ ,  $s(f, \Delta)$  を導入して積分可能性を定義する. このとき, ここでの定義 2.1 は命題 (つまり証明すべき事柄) になる.

**例 2.3.**  $f(x) \equiv k$  (定数函数) のとき.

$$R(f, \Delta, \xi) = \sum_i k(x_i - x_{i-1}) = k(b - a). \quad \text{ゆえに} \quad \int_a^b k dx = k(b - a).$$

**例 2.4.**  $f(x) := \begin{cases} 1 & (x \text{ は有理数}) \\ 0 & (x \text{ は無理数}) \end{cases}$  のとき,  $f(x)$  は  $[a, b]$  で積分可能ではない.

実際, 分割  $\Delta$  の各小区間  $I_i$  には無理数も有理数も存在する. 従って  $\xi_i$  をすべて有理数ととれば,  $R(f, \Delta, \xi) = b - a$ , そして  $\xi_i$  をすべて無理数ととれば,  $R(f, \Delta, \xi) = 0$  となって,  $R(f, \Delta, \xi)$  が  $\xi$  の取り方に依らずに一定の値に収束することはない.

● 定積分を定義に立ち戻って計算することはほとんどない.

定積分の線型性:  $\alpha, \beta \in \mathbb{R}$  のとき

$$\int_a^b (\alpha f(x) + \beta g(x)) dx = \alpha \int_a^b f(x) dx + \beta \int_a^b g(x) dx.$$

定積分の加法性：  $a < c < b$  のとき

$$\int_a^b f(x) dx = \int_a^c f(x) dx + \int_c^b f(x) dx.$$

約束：  $a < b$  のとき,  $\int_b^a f(x) dx := -\int_a^b f(x) dx$ . そして,  $\int_a^a f(x) dx := 0$ .

定理 2.5.  $a, b, c$  を任意の実数とするととき,

$$\int_a^b f(x) dx = \int_a^c f(x) dx + \int_c^b f(x) dx.$$

証明. 丁寧に場合分けをするだけなので略. □

定理 2.6 (定積分の単調性).

$$f(x) \leq g(x) \quad (\forall x \in [a, b]) \implies \int_a^b f(x) dx \leq \int_a^b g(x) dx.$$

定理 2.7.  $\left| \int_a^b f(x) dx \right| \leq \int_a^b |f(x)| dx$ .

証明.  $-|f(x)| \leq f(x) \leq |f(x)| \quad (\forall x)$  より

$$-\int_a^b |f(x)| dx \leq \int_a^b f(x) dx \leq \int_a^b |f(x)| dx.$$

定理はこれより直ちに従う. □

閉区間  $[a, b]$  で連続な関数は最大値と最小値を持つ. 特に有界であるので, 積分可能性を論じることができる.

定理 2.8.  $f(x) : [a, b]$  で連続  $\implies f(x) : [a, b]$  で積分可能.

定理 2.9 (微分積分学の基本定理).

$f(x) : [a, b]$  で連続,  $F(x) := \int_a^x f(t) dt \quad (x \in [a, b])$

$\implies F(x)$  は  $(a, b)$  で微分可能で,  $F'(x) = f(x) \quad (\forall x \in (a, b))$ .

すなわち, 連続関数は必ず原始関数を持つ.

定理 2.10.  $f(x) : [a, b]$  で積分可能, かつ原始関数  $F(x)$  を持つ

( $f(x)$  が連続ならば OK)

$\implies \int_a^b f(x) dx = F(b) - F(a)$ . 右辺を  $[F(x)]_a^b$  と書く.

• この定理により, 高校のときのように, 原始関数を求めて定積分を計算すればよいということになる.

定理 2.11 (積分の平均値の定理).  $f(x) : [a, b]$  で連続

$$\implies \exists c (a < c < b) \text{ s.t. } \int_a^b f(x) dx = f(c)(b - a).$$

証明.  $F(x) := \int_a^x f(x) dx$  とおく. 微分の所で学んだ平均値の定理から

$$\exists c (a < c < b) \text{ s.t. } F(b) - F(a) = F'(c)(b - a).$$

$F(b) - F(a) = \int_a^b f(x) dx$  と  $F'(c) = f(c)$  より定理が従う. □

命題 2.12.  $f(x) : [a, b]$  で連続, かつ  $f(x) \geq 0 (a \leq \forall x \leq b)$ .

$$\int_a^b f(x) dx = 0 \implies f(x) = 0 (a \leq \forall x \leq b).$$

注意 2.13. 積分の単調性から,  $\int_a^b f(x) dx \geq 0$  である. 命題は,  $f(x)$  が連続ならば, この等号が成立するのは,  $f(x)$  が恒等的に 0 の時に限ることを主張している.

命題 2.12 の証明.  $\exists c \in [a, b]$  s.t.  $f(c) > 0$  とする.  $f(x)$  は連続なので,  $c = a, b$  であっても,  $a, b$  の近くで  $f(x) > 0$  となるので,  $a < c < b$  としてもよい. このとき,  $\varepsilon > 0$  が存在して, 閉区間  $[c - \varepsilon, c + \varepsilon]$  で  $f(x) > 0$  である.  $m := \min_{x \in [c - \varepsilon, c + \varepsilon]} f(x)$  とおくと,  $m > 0$  であって,

$$\int_a^b f(x) dx \geq \int_{c - \varepsilon}^{c + \varepsilon} f(x) dx \geq 2m\varepsilon > 0$$

となつて, 仮定に反する. □

例 2.14.  $I_n := \int_0^{\pi/2} \sin^n x dx (n = 0, 1, 2, \dots)$  について:

$x = \frac{\pi}{2} - y$  とおくと,  $I_n = \int_0^{\pi/2} \cos^n x dx$  となるので,  $\sin$  が  $\cos$  になつても結果は同じであることに注意しておこう. さて  $n \geq 2$  のとき

$$\int \sin^n x dx = -\frac{1}{n} \sin^{n-1} x \cos x + \frac{n-1}{n} \int \sin^{n-2} x dx.$$

であつたから (先週の計算)

$$I_n = -\frac{1}{n} [\sin^{n-1} x \cos x]_0^{\pi/2} + \frac{n-1}{n} \int_0^{\pi/2} \sin^{n-2} x dx = \frac{n-1}{n} I_{n-2}.$$

ここで,  $I_0 = \frac{\pi}{2}$ ,  $I_1 = \int_0^{\pi/2} \sin x dx = 1$  ㊦え,  $m \geq 1$  のとき

$$I_{2m} = \frac{2m-1}{2m} I_{2m-2} = \frac{2m-1}{2m} \frac{2m-3}{2m-2} I_{2m-4} = \cdots \\ = \frac{(2m-1)(2m-3)\cdots 1}{2m(2m-2)\cdots 2} \cdot \frac{\pi}{2} = \frac{(2m-1)!!}{(2m)!!} \cdot \frac{\pi}{2},$$

$$I_{2m+1} = \frac{2m}{2m+1} I_{2m-1} = \frac{2m}{2m+1} \frac{2m-2}{2m-1} I_{2m-3} = \cdots \\ = \frac{2m(2m-2)\cdots 2}{(2m+1)(2m-1)\cdots 3} \cdot 1 = \frac{(2m)!!}{(2m+1)!!}$$

例 2.15 (Wallis の公式).

$$\pi = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \left( \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \right)^2$$

証明.  $0 \leq x \leq \frac{\pi}{2}$  のとき,  $\sin^{2n+1} x \leq \sin^{2n} x \leq \sin^{2n-1} x$  であるから

$$\int_0^{\pi/2} \sin^{2n+1} x dx \leq \int_0^{\pi/2} \sin^{2n} x dx \leq \int_0^{\pi/2} \sin^{2n-1} x dx.$$

例 2.14 より

$$\frac{(2n)!!}{(2n+1)!!} \leq \frac{\pi}{2} \cdot \frac{(2n-1)!!}{(2n)!!} \leq \frac{(2n-2)!!}{(2n-1)!!}$$

左側の不等式から

$$\pi \geq 2 \cdot \frac{((2n)!!)^2}{(2n-1)!!(2n+1)!!} = \frac{2}{2n+1} \left( \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \right)^2 = \frac{2n}{2n+1} \frac{1}{n} \left( \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \right)^2.$$

右側の不等式から

$$\pi \leq 2 \cdot \frac{(2n-2)!!(2n)!!}{((2n-1)!!)^2} = \frac{1}{n} \left( \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \right)^2.$$

よって

$$\pi \leq \frac{1}{n} \left( \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \right)^2 \leq \frac{2n+1}{2n} \pi$$

において  $n \rightarrow \infty$  とすれば Wallis の公式を得る. □